

氏名	生田 夏樹
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第 号
学位授与の日付	平成17年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	Etude synchronique et diachronique de la locution verbale <i>venir de + inf.</i> dite «passé récent» (近接過去 <i>venir de+inf.</i> についての共時的, 通時的研究)
学位論文審査委員	主査・教授 木之下忠敬 教授 永瀬 春男 助教授 上田 和弘 助教授 延味 能都 助教授 金子 真 大阪外国語大学外国語学部助教授 木内 良行

## 学位論文内容の要旨

本論文はフランス語における所謂「近接過去」と言われている *venir de + inf.* の表現が持つ「近接性」の意味とその意味機能を共時的かつ通時的に研究したものである。A4版ワープロ用紙で236ページ(付録図版4ページ)、全文フランス語で書かれたものである。内容は既発表の論文をもとにし、新たに書きおこした章・節を加えて全体を統一したものである。構成は第一部(共時的研究)、第二部(通時的研究)の二部構成で、その前に総序としての問題提起がある。

### 序章

フランス語の動詞句 *venir de + inf.* に関しては「近い過去を示す」というのが今日広く受け入れられている定義となっている。しかし、実際にはこの定義ではうまく説明できない事例が出現する。従って、従来の定義が不十分なのではないか、また、この動詞句の使用状況が所謂「近接過去の表現」という枠を越えて広がっているのではないか。従来の定義が不十分なならば、如何に定義し直すべきか。この動詞句が「近接過去」という単なる時間的関係の表現にとどまらないとするならば実際にはどのような使用状況があるのか、またその新たな使用状況はどのような過程を経て生じたのか。これらの問題を明らかにするのが本研究の目的である。

### 第一部：使用状況についての共時的な考察

序 従来の辞書・文法書では *venir de + inf.* がどのように定義されているかを検証。「近い過去を示す」という定義が広く認められていることを確認。そこで、この定義では説明出来ない例を提示。この問題を解決するためには、(1) *venir de + inf.* のアスペクト価値の再定義、(2) 様々な使用状況の確認、(3) この様々な使用状況を(1)の再定義で説明すること、が必要である。そこで、現代フランス語ではこの動詞句がどのように使用されているかをコーパスを限定し検索した。使用したコーパスは、(1) *Le Monde, sélection hebdomadaire, édition internationale, Nos 2578(04/04/1998)-2591(04/07/1998)*, (2) *Le Monde, sélection hebdomadaire, Nos 2677(26/02/2000)-2688(13/05/2000)*, (3) *Le Point, Nos 1411(01/10/1999)-1424(31/12/1999)* である。その結果 *venir de + inf.* の478例を収集した。

第1章 先行研究(Gougenheim, 1969; Vet, 1980; Vetter, 1989; Flydal, 1943; Lebaud, 1992; Imbs, 1960; Damourette & Pichon, 1911-1936) の批判的検討から、本研究では動詞句 *venir de + inf.* を考察する場合どのような立場を取るべきかを考察。その結果、この動詞句を時間的関係の表現として捉えること、そして、不定詞で示された出来事によってもたらされる状況を考慮に入れた形で、時間的近接性を明確な形で定義し直す必要を確認。

第2章 Desclés(1989, 1991, 1993)による「状態」、「イベント」、「未完了プロセス」の定義、及び *venir de + inf.* に関する指摘から、この動詞句を「未完了プロセス」を表すものと捉え、不定詞で表現された出来事から生じ、時間の経過とともに漸減していく痕跡(*trace décroissante*)という概念を導入し、動詞句 *venir de + inf.* を次のように再定義する：「*venir de + inf.* は未完了プロセスのアスペクトを持つ。この未完了プロセスは漸減的痕跡を発話時点もしくは過去のある時点において進展中の局面と捉えた状況である。不定詞で表現された出来事は漸減的痕跡が時

間とともに漸減しながらも、発話時点ないしは過去のある時点において残存している、という意味で近接性を持つ」。

第3章 様々な使用状況から生まれる意味効果。Lebaud(1992)が指摘した「理由づけ・正当化」の用法は、「未完了プロセスのAspect値をもたらす漸減的痕跡が、不定詞で表現された出来事の結果生じる説得力という形をとって現れる場合である」。これ以外の意味効果は筆者が初めて指摘するものである。「関心を引くケース」、「想起を促すケース」。前者は「未完了プロセスのAspect値をもたらす漸減的痕跡が、不定詞で表された出来事の結果生じる影響力という形を取って現れる場合」であり、後者は「未完了プロセスのAspect値をもたらす漸減的痕跡が、不定詞で表された出来事についての読者ないしは聞き手の記憶という形を取って現れる場合」である。

第4章 「近接性」よりも「隣接性・同時性」を表す venir de + inf. 動詞句 venir de + inf. は前章で述べた意味効果のほかに、「隣接性」や「同時性」をも表す場合もある。「隣接性現象を伴って直接的原因を示すケース」：これは未完了プロセスのAspect値をもたらす漸減的痕跡が、不定詞で表された出来事の登場人物に対する物理的ないし精神的作用という形を取って現れる場合である。「同時性現象を伴って五感で知覚されたことを説明するケース」：これは未完了プロセスのAspect値をもたらす漸減的痕跡が、不定詞で表された出来事が登場人物に及ぼす知覚的刺激という形を取って現れる場合である。「隣接性現象を伴って状況を総括するケース」：これは未完了プロセスのAspect値をもたらす漸減的痕跡が、不定詞で表された出来事がその登場人物に引き起こす心の高ぶり（満足感ないしは失望感）という形を取って現れる場合である。

第一部 結論 動詞句 venir de + inf. は不定詞で表された出来事が近接であることを表すだけにとどまらず、その使用状況は所謂近接過去表現という枠を越えて広がり多様化している。何れの使用状況の場合にも、この動詞句の基準点としては、言語化されていると否とを問わず、話者の意識の中に構築される基準点こそが本質的である。この動詞句は、基準点において漸減的痕跡が残存していると話者が判断した時に用いられる。旧来の定義を補足するならば、動詞句 venir de + inf. は、話者の意識の中に構築される基準点において、不定詞で示された出来事の漸減的痕跡が残存していると話者によってみなされる、という意味で「近い過去」を表す。

#### 第二部：使用状況の通時的考察

序 歴史的には、動詞句 venir de + inf. はもともとは物理的移動を示すものであったが、所謂「近接過去」の意味を持つようになったのは、Flydal(1943)によれば17世紀からだということになっている。迂言的用法（「近接過去の意味」）が物理的移動の意味に対して優位を占めるようになったのは、17世紀になってからなのか、それともそれ以前なのか、この時期を明らかにすること。そして第一部で示したように、この動詞句が時間性以外の意味を帯び、使用状況が多様化してくるプロセスを明らかにする。これは未だ為されていないことである。用例検索のために利用したサイトは、Gallica Classique(<http://gallica.pnf.fr/Classique>), ATHENA(<http://un2sg4.unige.ch/athena/html/fran-fr.html>), ABU(<http://abu.cnam.fr/>), Trismégiste(<http://www.chez.com/trismegiste/>), FRANTEXT(<http://atilf.inalfr.fr/frantext.htm>)である。

第1章 各コーパスにおける venir de + inf. の出現件数をコーパスの総語数で割った値に1000を掛けて算出したものを「頻度指数」とする。その結果、時代が現代に近づくにつれ頻度指数が高くなっている傾向が明らかになる（グラフ1）。

第2章 16世紀から17世紀に関しては、16世紀後半以降頻度指数が高くなり始め、17世紀では16世紀に比較して全般的に頻度指数が高い傾向が見られる。16世紀の頻度指数は平均値で0.053。これに対し17世紀の頻度指数の平均値は0.349である（グラフ2）。18世紀は17世紀に比べコーパス間の使用頻度のバラツキが見られる。18世紀の平均頻度指数は0.334である（グラフ3）。19世紀は18世紀に比較してコーパス間の使用頻度のバラツキはあまり見られない。19世紀の平均使用頻度は0.369である（グラフ4）。

第3章 近接過去表現としての venir de + inf. の定着。この動詞句が物理的移動の意味で用いられているのは、主体が不定詞の表す行為を完了した場所を起点とする移動を行ったという事実が重要な意味を持つ場合のみである。一方、物理的移動自体が問題になっていない限り、つまり不定詞が表す行為の実現そのものが問題とされている限り、venir de + inf. は迂言的表現（近接過去）として用いられていると考えて差し支えない。この弁別基準に従い、16世紀の文学作品（総語数1045,000語）を調べると、出現したこの動詞句は70件であり、そのうち69件までが近接過去を表すものであった。そしてこれらを含む作品は全て16世紀中期ないしは後期のものではなかった。従って、17世紀の到来を待たず、16世紀中頃にはこの動詞句は物理的移動の表現としてよりも、近接過去としての表現として確立されていたと言える。

第4章 近接性と直接関連する意味効果を持つ表現の17世紀における出現。近接

性の表現以外の意味効果を伴った使用状況として、まず17世紀前半から「正当化するケース」が見られるようになり、次いで17世紀中頃から「想起を促すケース」並びに「関心を引くケース」が出現するようになった。

第5章 17世紀までのテキストでは、半過去形におかれたvenir de + inf. の基準点は何らかの形で必ず明示されていた。ところが、18世紀に、この基準点が明示されることなしに半過去形のこの動詞句がつかわれるようになった。これは新しくエピソードを始める場合に多く見られる。基準点を明示せずに半過去形のこの動詞句を用いることで、読者自らが不定詞で表現された出来事が起きて間もない状況の中に、ひいては次ぎに起こる出来事の背景的状况の中に（心理的に）身を置くようにし向ける効果をねらったものであろう。

第6章 見かけ上の基準点と潜在的基準点の分化。この動詞句は、19世紀の前期に「隣接性現象を伴って直接的原因を示すケース」が現れ、次いで中期に「同時性現象を伴って五感で知覚されたことを説明するケース」が現れ、後期に至り、「隣接性現象を伴って状況を総括するケース」が現れる。動詞句venir de + inf. の用法に関し、見かけ上の基準点と潜在的基準点の分化が生じ、「隣接性」、「同時性」をも表現するようになったことは画期的なことである。

第二部結論 17世紀の到来を待たずに、16世紀半ば、あるいは遅くとも16世紀後半には、動詞句venir de + inf. は所謂「近接過去」の表現としてほぼ定着したと考えられる。17世紀に近接性に直結した範囲で使用状況が拡大し、約2世紀の期間を隔てて19世紀に近接性に直結しない使用状況への拡大が生じた。

結論 基準点における「漸減的痕跡」という概念を導入することにより、不定詞で示された出来事の近接性の意味、さらには、この動詞句が「近い過去を表す」ということの意味を明確に規定することが可能になった。それとともに、「動詞句 venir de + inf. は未完了プロセスのアスペクト価を持つ」というDesclésの定義を敷衍して、この動詞句をDesclésの文法モデルの枠内で定式化し直すことができた。

## 学位論文審査結果の要旨

学位審査会は2005年2月7日、学内審査委員4名、学内招聘審査委員1名、学外招聘審査委員1名の計6名によって行われた。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、フランス語の動詞句venir de + inf. が「近接過去を表す」と言われていることについて、これまでなされていなかったその「近接性」の正確な定義を共時的観点から行い、その後、この動詞句が「近接過去」を表すようになった歴史的経過を通時的に研究したものである。本研究は膨大な資料を駆使しつつ、理論的かつ実証的にこの問題に取り組んだものとして、当該研究領域において大きく寄与しうる内容と評価できる。

本研究では、まず共時的観点からの考察として、先行研究における「近接性」の定義をすべて批判的に検討したのち、これまでの定義では説明しきれなかった用例を理論的に説明するものとして、Desclésの「venir de + inf. は未完了プロセスのアスペクト価を持つ」という指摘に着目し、それに独自の「漸減的痕跡 trace décroissante」という概念を導入することで、これまで説明不十分であったものを説明してみせた。また、この新しい概念「漸減的痕跡」によって、これまで指摘されていなかったこの動詞句venir de + inf. の新しい意味効果と使用状況を摘出し理論的な説明を行ってみせた。次いで、通時的観点からの考察として、この動詞句はもともと物理的空間移動を表すものであったのだが、これが時間的近接性の表現となったのは、17世紀以降だと一般的に言われていることについて、資料を駆使し、正確な時期特定を行い、16世紀中頃かまたは後半という新しい結果を得た。また、共時的観点からの考察で指摘した、この動詞句の新しい意味効果と使用状況が、歴史的にいつごろから出現しているのかについても、様々な用例をあげその時期を特定してみせた。

論文の構成としては、まず共時的観点からの理論的考察を、先行研究を十分に視野に入れて丁寧に行い、さらに自説を展開し、次いで、共時的観点からの考察で指摘したことがらを通時的観点から説明してみせるという見事なものであった。論文のフランス語も立派なものであり、審査委員一同感心した次第である。

以上のように論文に関して積極的かつ肯定的な評価が審査会での共通の意見であったが、いくつかの指摘もなされた。

動詞句venir de + inf. に関してアスペクトを問題にするのならば、「複合過去」との相違についての言及と説明が必要なのではないか。近接過去という判断の基準点が「潜在化」というのであれば、「自由間接話法」などにおける「視点」のありようとはどのように関係してくるのか。通時的考察のコーパスとして16世紀以前のものはなぜ参照しなかったのか。等々である。これらに関して、審査委員及び学位請求者との間で非常に活発な議論がなされ、これも有意義であった。膨大な資料を扱う場合、コーパスに関し、現時点では電子化されていないものがまだ多くあ

ること、中世のテキストにおける綴り字法の不安定さから、検索の困難さなどが話題となった。「複合過去」との関係の問題、フィクションにおける「自由間接話法」の場合の視点の移動との関係等は、学位請求者の今後の課題とすべきであろうと意見が一致した。最後に、本論文で取り上げられた、動詞句 *venir de + inf.* の用例は、これまでこのような研究がないことから、非常に貴重なものであるということで意見が一致した。

審査委員会は、以上のことから、本論文を博士の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。